



TITLE:

# 東南アジアの構想力 - 「想像の共同体」論批判を通じて東南アジアを考える

AUTHOR(S):

高谷, 好一; 早瀬, 晋三; 田村, 克己

---

CITATION:

高谷, 好一 ...[et al]. 東南アジアの構想力 - 「想像の共同体」論批判を通じて東南アジアを考える. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 13: 1-17

ISSUE DATE:

1996-02-29

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187534>

RIGHT:

## 東南アジアの構想力－「想像の共同体」論 批判を通じて東南アジアを考える

高 谷 好 一

今日の報告には二つの意識が働いている。一つには、来年の国際シンポジウムに向けての試みということになるだろう。例によって、生態、文化、社会という分野から、それぞれ代表者を出して問題提起をしようという話が出ていたが、そのような輪切りの議論では、重点領域研究の面白味が無くなってしまう。やはり、社会学からも生態を議論し、生態からも国民国家を考えるような議論をすべきだと考えている。私はこれを強く主張したために、この報告を引き受ける状況に陥ってしまった。ことさら素人的な議論になろうかと思うが、ご容赦願いたい。ともかく、生態からずっと上のところまで、一つの筋を通したいというのが、この話のねらいである。

一方、こんな話をしていた折りに、我々の仲間である土屋さんの逝去があった。私は彼とインドネシアの民族運動や、国民国家論をもっとしておくべきだったと、心残りではない。もう土屋さんはいないのだけれども、もう一度彼の本を読み、私なりに感じたことをここで語りたいと思う。この報告のもう一つの側面は、土屋さんへの語りでもある。

ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」という有名な著書がある。この「想像の共同体」論で言われているインドネシアの国民国家は、以下のようなものである。元々多様な言語を話し、バラバラな生活を送っていた所に、オランダによる植民地化があった。植民地化はそこにオランダ語という共通の言語をもたらし、バラバラだったところに新しい文化的なネットワークができることになった。そこでは、やはりオランダからもたらされた「モジュール」も入り、インドネシアは国民国家へと急展開していった。そのうち、共通言語はオランダ語からインドネシア語へと移り、それまでオランダ語を話していたエリート達も、インドネシアへ「帰化」することとなる。ヨーロッパで形成された国民国家の「モジュール」が、インドネシアの国民国家を形成したということなのである。

そのヨーロッパでは、ラテン語を話す封建諸侯が、民衆の言葉である地方語に帰化する「王の帰化」というのが、国民国家形成の重要な現象とされている。つまり、それまではラテン語がヨーロッパの王族達の共通の言語であり、地方語を話す民衆達と王との間には明確な断絶があった。ところが産業が発達し、王同士が重商主義で鎬を削るようになる。それに生き残るためには、経済に明るい官僚群を登用しなければならなくなった。多くの官僚は地方語しか話せなかった。地方語を話す官僚達が増えれば、もう王もラテン語に執着することはできない。そこで、王自身が土地の言葉に帰化することになった。そこから、人々が共同体意識を持つようになり、国民国家へと発展していった。これが一つの「モジュール」として、世界へ拡大し

ていく。インドネシアも、まさにこの方法で国民国家が作られたと言うのである。

だが、私はそれは違うと言いたい。この議論には歴史的な誤認があると私は思う。もし東南アジア全体がそうなのだというのであれば、それは違うのだと言わねばならない。確かに、東南アジアにはジャワ語、スダ語、ミナンカバウ語等の多くの言語があり、バラバラな世界があった。それが植民地化でエリート達はオランダ語を話すようになり、一つのものが作られたという話だが、その「多様な言語」というところは実際にはもっともっと根の深いものであり、この問題を本当に正しく考えようとする、風土性や生態的基盤ということを考えに入れないといけないと思うのである。

タイにはデルタや平原という生態、ジャワには火山山麓、そしてマレー周辺には多島海という生態がある。このような多様な生態が東南アジアにはあるのである。それらを踏まえた上で、国家の形成や歴史を見ていかないといけないのである。以下に私は簡単に歴史を見ていきたいと思う。各専門の方々がおられるから間違いだと指摘されるかもしれない。指摘があれば訂正していきたいと思うが、もしそれがマイナーな訂正であるならば、見逃していただきたい。大筋での議論にしたいと思うからである。

まずタイの歴史から見ていきたい。タイの周辺には太古から強固な王国の伝統があった。8世紀頃にはクメールという巨大な国家があった。インド風の寺院を作り上げ、厳然として存在し、そこにはデヴァ・ラジャ(神なる王)がいた。私はこのクメールが現在のタイ国まで脈々と続くものだと言いたい。このことは視野に入れておくべきだと考えている。そこからアユタヤという国が出現し、その後、今のラッタナコーシンの王朝になっていく。

国家論で問題になるのは、ラーマ4世あたりから考えればどうだろう。タイという所は、デルタと平原の地だが、その頃、そこで実際に行われていたことは、貿易であった。南海物産を集め、中国と交易を行った。ラーマ4世は自らを「シャムのバンコクの首都ラッタナコーシン・マヒンドラアユタヤ市の河川流の所有者」と称していた。港の経営者であって、領土は持っていなかったのである。

次のラーマ5世の頃になると、ヨーロッパ列強による侵略が現実のものになっていた。国を盗られることをおそれたラーマ5世は、ヨーロッパ流に言えば重商主義の政策を打ち出すことになった。身近な貴族を抑え、専制的な権力を手に入れると、様々な政策を貫徹して、経済的な基盤をも確立していった。デルタの開墾、鉄道の建設等である。こうして、タイの王国は領域国家的なものに転身していった。

面白いと思うのが、その次のラーマ6世のときである。重商主義で強くなったタイに「ラク・

タイ」という正統性原理を持ってきた。この地には原初から仏教を信仰するタイ民族が住み、その仏教を擁護し、タイ族を統べるのが王であるという考え方である。ここでは民族、宗教、王というものが不可分のもととしてあったとされ、タイは健全な国民国家であるという説明がされたのである。

ところで、ここで、非常に面白いのは、王が単なる仏教の保護者ではなく、もっと強力なものとして受け取られていたということである。そこにクメールの時代のデヴァ・ラジャ、「王は神なり」という観念が重なっていたのである。偉大なる王は神の化身としての絶大なパワーを持っており、しかも、仏法の守護者である。すなわちダルマ・ラジャと受け取られていたのである。

こういうことだとすると、これはヨーロッパに見られる「王の帰化」などというようなものとは全く違うのではないか。ラーマ6世は、タイの正統性原理を遥かな昔の伝統「デヴァ・ラジャ」から掘り起こし、自らダルマ・ラジャとなった。こういうものを私はタイの歴史から見ている。

タイの平原やデルタでは、農民が百姓をしている。しかもそのすぐ横には、巨大なアンコールという遺跡が、インド的な空間として存在している。そして、かつて彼等は貿易をしていた。そういう生態と伝統の中から、タイという王国が出てきたのである。

さて、インドネシアではどうだったのか。ジャワの火山山麓には、ボロブドゥールという巨大なヒンドゥー寺院がある。やはりここにもデヴァ・ラジャがいた。シャイレンドラの時代、マジャパヒトの時代、そしてマタラムの時代全ての時代を通じて、この火山山麓には多くの農村が生まれ、よく熟成した農村地帯が広がった中でその中心に王家が作られていた。その王家では宮廷文化が生まれ、複雑な敬語体系が作り上げられ、ワヤンのような芸術も栄えた。文化は極めて高度なものになっていった。そこにスーパーナチュラルなパワーを持つ王が存在していた。民衆の間には、王に強力なパワーが集まっているのだという理解があった。

海域のマラッカもまた、マレー系の年代記に表されるように、王は白い血を持ち、超人的なパワーを持つ者として存在していた。だが、ここはタイやジャワとは全く異なる生態を持っている。周りは深い森で覆われ、前面には広大な海が広がっている。そこでの人々は、森林物産を採集したり、魚を捕まえたりしていた。そして、それらを出荷し、搬出するイスラーム商人の港があった。このような中で出てくる王は、これまた超人的な力を持つ王になった。ここでは王はしばしばイスラームのスーフィー的呪術で強化していたようである。いずれにしても、東南アジアで見られる王の姿は、宗教的、超俗的である。これはヨーロッパでアンダーソン達がイメージするものとはかなり違っているのではないか。

仮に、その「想像の共同体」論が正しいとしてみよう。皆が一丸となってインドネシアを

作ったのだ。だからインドネシアのためなら、人々は命を投げ出すようにさえなったのだという説明を認めたでしょう。もしそうだとすると、今のインドネシアは、なぜあのように堅苦しいのだろうか。皆が制服を着せられ、縛られている。白石さんの言う「制服の氾濫」がある。加藤さんの言う「エスニシティの飼育」という状況がある。土屋さん自身も同じ状況を認めて、「知の逼塞状況」と言い表している。民衆にも、エリートにも、言いたいことがあるのだが、何も言えない。このような息づまりそうな状況をどう考えればいいのだろう。

私に言わせれば、それは当然のことなのだということになる。言語からだけで考えていては、駄目なのである。そこにはジャワ火山世界と東南アジア海域世界という、全く性格の異なる二つの生態があるというところから考えていかないと駄目なのである。現在のインドネシアという国の中には二つの全く違う「世界単位」がある。そこでは生態だけではなく、生業も違えば、人々の考え方も違う。これを無理に一緒にくっつけて一つの国家に仕立てている。こういう所では「想像の共同体」というのは本当はあり得ないのである。

この二つの「世界単位」をもう少し詳しく述べてみよう。一方はジャワの火山世界である。ここは熱帯の中でも格段に居住環境の良い所である。水たまりが少なく、蚊が少ない。加えて山腹にはスキっとした風が吹く。肥沃な火山灰土壌と豊富な谷川の水が、農業に絶好の条件を与えている。そういう所で、遥かな太古より成熟した農村が育ってきた。8世紀の終わりには、あのボルブドゥールが作られている。ヨーロッパでは、ちょうどシャルルマーニの頃である。ボルブドゥールは、シャルルマーニュの都に比べたら問題にもならないような大きなものであった。周りには、既に相当成熟した農村が形成されていた。

一方、多島海域世界には人の居住を許さない瘴癘の森が広がっていた。住もうものなら蚊に喰われ、たちまちマラリアで殺されてしまう。人は蚊の少ない河口に高床式の家を建てて住むか、船で生活していた。そこから森林へ物産を採りに入り、採り尽くすと、他へと移動していった。中には採取した物産を船で運ぶ商人がいた。だが、農村などというものは全くなかった。

この海域世界の生活は、日本の縄文時代をイメージしてもらえば理解しやすいだろう。縄文時代、人々はキャンプ暮らしで移動をくり返していた。米を作るからこそ、定住しても食べていけるのである。狩猟採取の生活ではどうしても動かざるをえない。春には海岸で貝を拾い、山で若芽を摘む。夏には沖へ出て漁をし、秋には森で木ノ実を集め、冬には山で獣を追う。人々は食べるために移動を余儀なくされるのである。農業ができるかどうかで、その生活形態は全く違ったものになる。この二つのものが、東南アジアにはつい最近まであったのである。ジャワ世界と海域世界はそういう二つなのである。そこを見落としてもらっては困る。

そこではまた、違うタイプのエリート達がいることになるのだが、その前に私の体験的エリート論を話しておきたいと思う。最近、私は京大の東南アジア研究センターを辞めて、故郷の滋賀県立大学に勤めることになった。つまり、町へ出たものの、また田舎へ帰ってしまったのだが、その私の個人的経験からこの東南アジアのエリート達のことを考えてみたいと思う。

私は小学校の頃から秀才だった。だから、順調に進学し、田舎を飛び出して大学へ行った。その頃の私は田舎が嫌だと思っていたから、新天地で生きることを喜び、希望に満ちていた。立派な人間になろう、そして、故郷に錦を飾ってやろう。そんな意気込みで飛び出したのだ。つまり私は、田舎の民衆とは違うエリートの卵だった。

だが、就職し、東南アジア研究センターに来て10年もなると、両親のことが気に掛かりだしてきた。田舎には田舎の付き合いがあるのである。その頃、私は本来ならば自分が家を代表して、近所や親戚の付き合いをしなければならないような歳になっていた。いつも言い訳をし、肩身の狭い思いをしながらも、私には何も言わずにいる、そんな両親のことが気になっていた。だが、その頃の私はそういう心の葛藤とは別に実際の生活は一段とラディカルになっていった。申し訳ないという気持ちの一方で、何か偉業を成し遂げてやるぞ、それが恩返しだというような気持ちが強く働いていたのである。

そんなラディカルな状況も、その後は随分とすり減って、結局、私は滋賀へ帰ってしまった。

さて、田舎へ帰ってからのことだが、現実の生活には両面があるのだということをつくづく思った。若い頃は田舎の嫌な面ばかりを見ていたが、良い面もあるじゃないか。町にしても同じだ。良い面ばかりではない。どこへ行こうが、常に両面が一枚の紙の裏表のように剥がし難く密着している。なかば諦めのような感情かもしれないが、そういうものとしての田舎を見ることになったのである。今ではことさらに田舎が良いともちあげたり、悪いと言って切り捨てたりしようとは思わない。

だが、なぜ私はこのような葛藤を持続けてしまったのだろうか。そのことを私は最近思うのである。東南アジア研究センターにも同僚は多いが、誰もがこんなことを私のように深刻に考えたり、苦しんだりしているわけではなさそうである。なぜこのような差があるのだろうか。そのことを考えるのである。それは、彼らが町で育ったからなのだろう。私は田舎者だったからである。田舎に根が張ってしまっているからである。そんな風に私は考えるのである。

「想像の共同体」を作り出したエリート達に話を戻そう。土屋さんの『インドネシア思想の系譜』には「ロンゴワシルトとカルティニ」、「スカルノとハッタ」という二つのエリートの対比論が載せられている。私はこれを非常に面白いと思い、また同時に非常に身につまされて読んだ。

ロンゴワシルトはジャワに仕えた最後の宮廷詩人である。死に絶えてゆくマタラム王国から離れられず、葛藤の内にジャワの魂をジャワ語で語り続けた人物である。彼は今でもジャワの人々の心の中に生き続けていると言われている。ジャワ民衆の代表とも言えるのだろう。一方のカルティニは海岸の町ジェパラの県知事の娘で、オランダ語に習熟しており、友人に宛てた数々の手紙もオランダ語でしたためている。ところで、その手紙だが、その中で彼女が書き表したジャワの風景は、土屋さんに言わせれば、実態とはおよそかけ離れたものであったというのである。どろどろした実際のジャワとは全く切り離された観念の中のジャワがカルティニの頭の中だけで作り上げられ、それが「麗しのジャワ」という形で描き出されているというのである。

ジャワの内陸部には、いかにもジャワ的なロンゴワシルトという人物がいた。一方の海岸部には、まるでオランダ人のように現地から遊離し、観念の世界に生きたカルティニという人物がいた。このどちらのエリートが、インドネシアの国民国家というものにつながっていくのだろうか。それはカルティニだと土屋さんは主張するのである。〈想像の共同体〉を作りあげるのに力のあったのはカルティニだったというのである。

もう一つの「スカルノとハッタ」でも、似たような対比が読みとれる。スカルノはジャワの心を歌い上げた。そして、民衆の魂に訴えた。民衆は理屈なしにそれだけで大いに鼓舞された。それをハッタが「アヒルの行列」と批判している。スカルノが何を言っているのかも聞かずに人々はついていく。もっと冷静になって考えなければだめだというのである。そのハッタをシャフリルが評している。「彼はインドネシア人ではなく、オランダ人だ」と言っているのである。ハッタはオランダの植民地支配を批判し、インドネシアの独立を主張しているが、インドネシア人が外国人支配を心底憎んでいっているというのではない。ちょうどオランダの共産主義者が、オランダ政府に敵対して言うのと同じ気持ちで言っているというのである。

私が面白いと思うのは、エリートにも二種類あるということである。スカルノのようにジャワと地下茎でつながっているようなエリートと、ミナンカバウで生まれ、青春をオランダで過ごしたハッタのように、まるで浮き草のようなエリートがいる。海域世界というのは、公海という極めてオープンなシステムに開いた世界である。それは、極めてインターナショナルなのである。そこでは人々が常に出入りし、外の情報が大量に入ってくる。そういう所は、人々が根を下ろしているジャワの火山世界帯とは全く違うのである。

オランダから独立しようというとき、彼らは共に闘った。その頃はうまくいっていたのである。共通の敵を目の前にしていたからである。だが、独立を勝ち得た後は、乖離していく。二つは元来全く別のものだからである。

インドネシアの人々は、何かというと、インドネシア語でうちのインドネシアを唄い、それを「タナ・アイル」と呼んで大事にするという。土屋さんは、それが民衆のインドネシアに対する共通の意識なのと言う。だが、私にはそうとは思えない。それがたとえインドネシア語であっても、ジャワの人はジャワの風景を想って唄い、ミナンカバウの人はミナンカバウの風景を想って唄っているのではなからうか。人々が「タナ・アイル」と言うとき、彼等はインドネシアという国を思っていたりはしない。彼らがそれぞれに持つ自分の故郷の風土をイメージしているのではなからうか。そのようなところで、いくらスハルトがインドネシアは一つなのだと声高に叫び、制服を着せてもうまくいきはしないのである。

そもそも、「想像の共同体」なるものを考え出したヨーロッパの世界と、東南アジアの世界というのは、全く違った構造をしていたのである。まず、私がイメージしたヨーロッパを模式的に述べてみよう。図1にそれが示してある。人間界はいくつもの小山のようになっている。そこには様々な民衆がおり、山の頂には王がいる。この王は、民衆とは違うラテン語という文化を持っていて、世俗的な権威を握っている。そして、さらにその上には、キリスト教という宗教的権威が、その世界全体を天蓋のように覆っている。

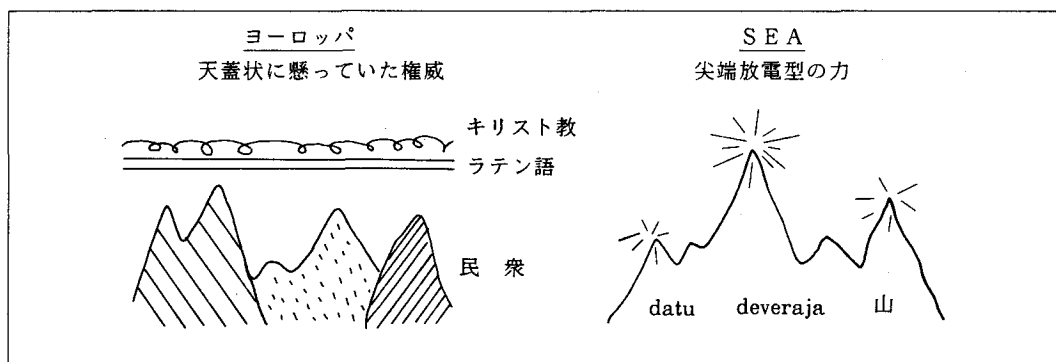


図1 ヨーロッパの権威と東南アジアの力

それに対して東南アジアには、同じような小山があるが、そこには人間だけがいるのではない。この小山は自然界そのものであり、人間もその中の一部として存在している。そして、その頂点ではおよそ「異形のもの」の全てが尖端放電をしている。デヴァ・ラジャはその一つで、これは強烈な放電をしている。港社会のダトゥも放電している。しかし、これはやや小さい放電である。彼等の持つ超俗的な力が、尖端放電を起こしているのである。放電しているのは人間だけではない。東南アジアではさまざまなものが放電している。それは巨木であったり、聳えたつ山であったりする。そういう異形のものが、パワーを持っていて尖端放電をしているのである。



そのような超俗的なパワーを基にして、東南アジアの王国は作られてきたのである。今でも  
そうなのかもしれない。確かにヨーロッパ的な考えが東南アジアにも入ってきた。しかし、私  
には全てがヨーロッパ風が変わってしまったとは思えない。まだ尖端放電する異形のものが、  
在り続けているように思う。

さてここで、私に与えられた本題の「東南アジアの構想力」を考えてみたい。最近、立本さ  
んが言いだした「シチュエーショナル・アイデンティティ」という言葉がある。東南アジアの  
本質を言い表した言葉である。その場の状況で自分をも変容させるような意味があるのだろう。  
私の言葉で言えば「他形的」というものになる。自己を確立している自形的世界の隙間に入り  
込み、弱いながらもよく生き残っていく。インドネシアだと、ジャワという自形的な社会があ  
り、その周りに他形的な海域世界が存在しているのである。だが、スハルトは自形的中心的世界  
だけで全てを見ようとしている。やはり、二つの世界がここには存在することをまず認めな  
ければならない。その二つを対話させながら、一つの国に作り直していくべきなのだろう。そ  
のときに本当にうまく共存する方法を考え出すのは、ジャワではない。海域の他形的な世界が、  
必ず効いてくると私は考えている。

私がこのような議論をするのは、インドネシアだけを視野に入れて言っているのではない。  
他の所でも同じことが起こっている。例えば中国でも、陸の世界と海の世界は幾度も対立を繰  
り返している。一番最近の例が毛沢東と蒋介石の闘いであった。本当は蒋介石が勝った方がよ  
かったのかもしれない。陸の世界と海の世界、つまり自形的世界と他形的世界はどのみち、無  
関係ではありえない。二つがともに生きていて初めて、世界は一つの完結体としてうまくいく  
と思うからだ。最近では地域統合などというものが議論されている。こんな場合には、シチュ  
エーショナルという性質が必ず効いてくる。だから、これからの世界においては、この東南ア  
ジアの持つシチュエーショナル性が「売り物」になるのではないだろうか。

もう一つの東南アジアの「売り物」として、私がこれはいいなと感じているものがある。そ  
れは先程も述べた「尖端放電する王」だ。要するに汎神論的な世界なのだが、これが東南アジ  
アではまだ消えてはいないと思う。地球上でさまざまな社会があるが、その中で、尖端放電す  
るアニミズムの世界があれば、これは楽しいではないか。

東南アジアでは生態がまだ効いている。その上に、生業がのり、社会がのり、国家ができて  
いる。そのところをよく考えておくべきだろう。インドや中国、ヨーロッパなどと比較して  
みると、東南アジアは優れてエコロジックである。つまり、この話は中国で通用するとは思え  
ない。インドやヨーロッパで通用するとも思わない。東南アジアでこそこの話なのである。

## コメント

早瀬 晋三

私の後に、田村さんが人類学の立場から東南アジア大陸部をみるコメントをされるだろうから、私に課せられた課題は、歴史学の立場から東南アジア海域世界、マレー世界をどうみるかということになると思う。ここは高谷さん流に言えば、「ネットワーク型の世界単位」となる。今日の高谷さんの話は、ほとんどがマレー世界の話であり、しかも歴史的なことも話されていた。ただ、私とは整理の仕方が異なっており、そうなる根本的に考え方自体も異なってくる。私なりにマレー世界の国家の形成と展開を時代を追いながら、国民国家がどのような歴史的コンテクストのなかでできたのか話してみたい。

東南アジアの国家形成にあたって、最初に影響を与えたのが、ヒンドゥー化にともなってもたらされた国家の編成原理となる宇宙論である。ただ、このヒンドゥー化というのは、とくにマレー世界の場合にはヒンドゥー教と仏教が混淆したものとして入ってきている。ポロブドゥールやアンコールなどの遺跡をみても、ヒンドゥー教のみで捉えることのできないもので、東南アジアではヒンドゥー化ではなくインド化と言われる場合もある。ともあれ、これによって東南アジアの王は、王たる正当な権利を主張し、支配者の権利を高めることができた。しかし、そういう面では有効に働き、非常に強い影響力を与えたヒンドゥー化も、王が実際に国を支配する制度的なものをもたらず、漠然とした社会統合はあっても、具体的に制度化された統治システムは作られなかった。王と宮廷が国の中心として存在はしていたが、それ以上の広がりについては、その時々 of 生態的条件や、王の個人的資質等によって変わっていった。ポロブドゥールなどの巨大な遺跡すらも、必然的にできたものではなく、むしろ偶然的な所産であったとも言える。その証拠に建設された後、維持・管理するシステムができなかった。さらに重要なのは、ここが小人口世界であったということだ。ここに制度的な国家体制という概念がもたらされていたとしても、それが有効に働いていたとはどうしても思えない。小人口世界を前提とするならば、生態的要因が大きくなるのは当然のことだと思う。

このような条件では、小規模な家産制国家が散在するだけで、自己完結的な社会で話は終わってしまう。だが、東南アジアではそれだけで終わることはなかった。ここは、中国との貿易である南海貿易と、インド洋さらにはヨーロッパを結ぶ東西貿易の交差点にあった。マレー世界の内海は、さしたる障害にならなかったどころか、ヒトとモノが動く原動力となって、海

岸の町と町を密に繋ぐことができた。そして、ここが小人口世界であったにもかかわらず、中国やインドといった当時の大人口世界の影響を受けることによって、ある特定の場所に人口が集中する現象が生じた。人間が社会的、文化的に活動するためには、ある一定以上の人口の集中が必要とされる。高度な社会・文化をもった小人口世界だからこそ、ヒトとモノが一点に集中する場所ができたとも言える。

ところが、このような小人口世界には、大量の非生産人口を養うだけの経済的基盤がなかった。当時のマレー世界では、人びとは平野に住むことができなかった。穀倉地帯となる平野は熱帯多雨林か湿地帯で、マラリヤなどのために利用できなかった。そのために、食糧を後背地の盆地での焼き畑などに頼る必要があった。林産物を含む後背地の産物は、河川を利用して運ばれるために、河口に港市が必然的に成立することになった。ただ、港市と後背地で相互補完をしているような、限られた狭い範囲でのネットワークは自己完結的で、物質的には非常に貧しいというのが、このような小人口世界の宿命でもあった。

このような生態的環境のなかで成立したマレー海域世界にイスラーム化がはじまった。「移動性」と「都市」という特性がもたらされ、マレー世界はこの特性に合致していく。時あたかも「交易の時代」(1450～1680)が始まろうとしていた。ヒトとモノが大量に行き交う時代に入ったのだ。ただ、ここでの人びとの移動は、高谷さんの言うような根無し草的なものではなかったと私は考えている。けっして流浪の民となったのではない。故郷と都市という、ふたつの帰る場所があった。根無し草ならば、人びとは歴史をもつことはない。だが、彼らは海洋民としての歴史を確実にもっている。自分たちの出自、家系、そしていろいろな伝承をもち、自分たちの故郷を自覚している。しかも、自分たちの行動範囲の中心に都市をもち、そこで様々なモノや情報を手にいれ、交流が生じていた。マレー世界の原動力は、この中心に群がる海洋民にあったのではないかと思う。従来、中心となった都市や港市に目が向けられてきたが、その都市の不確定な構成要素であった海洋民こそが、都市の浮沈の鍵を握っていたのではないかと思う。

イスラームの進出と華僑の誕生によって、自己完結的な港市と後背地という相互補完的なネットワークを基盤とするマレー世界は、自由貿易を前提として、さらに外に向かってネットワークを広げ、築いていく社会に変わっていった。ただ、それも無限に広がっていくのではなく、ある一定の相互補完的な場としてのネットワークが成立した。それはワレン(James.F.Warren)の言う「スルー・ゾーン」のような、ゾーンとして捉えられるものなのかもしれない。このような港市が、長距離貿易にも耐えられるだけの経済的基盤、制度と規模をもつようになり、マラッカのような王国が出現することとなった。

ところが、このマラッカ王国は、イスラーム交易ネットワークに支えられた国家であり、その後のポルトガルやオランダによる占領下では、都市としての機能を果たさなくなる。かわって、ジョホールやバンテンなどの港が発展することになった。当時の「交易の時代」は東西貿易の拡大だけでなく、中国、あるいは朝鮮、日本を含んだ南海貿易の拡大でもあった。バンコクやスルーのように、朝貢システムと華僑ネットワークを利用し、発展する港市も現れた。その一方で、ヨーロッパ人が支配する港市、マニラやバタビアのようなヨーロッパ勢力依存型の港市も出現してきた。国民国家が成立する前の東南アジアの国家をみるには、このようなマレー都市型、イスラーム都市型、華僑都市型、ヨーロッパ植民都市型という4つの基本型を考えておかねばならないだろう。これらが複雑に関連しながらマレー世界の都市や港市を形成し、その後の影響によって、国家の中心として発展するものもあれば、衰退し消滅するものもあったということになる。

このような歴史的背景のなかで登場してきたのが、マレー世界の国民国家だが、その首都はいずれも、マレー世界の特性としてか、ネットワーク世界＝国民国家の中心という役割を果たすようになる。それは首都だけが巨大化して、それ以外の都市は極端に小さいという特徴をみせている。それは、マレー世界の特色であった小人口を補うために、ひとつの都市が巨大化していくというものと相通ずる。その首都を基盤として国民国家が成立したのだが、その国家の形態はさまざまであった。シンガポールやブルネイのように、港市がそのまま国家になった国もあれば、マレーシアのように、伝統的な国家形態を残しながら、近代的な国民国家を形成していく国、あるいは、フィリピンのように、独立戦争も成功せず、アメリカ植民支配の秩序に乗るだけで、あまり国民国家形成の努力を行わずに今日に至っている国もある。そのなかで、とりわけ国民国家にこだわり、努力し続けているのがインドネシアだろう。インドネシアを研究する者が、国民国家にこだわる当然の状況があったと言える。

インドネシアの国民国家を考える場合、従来のマレー世界の4つの基本型とは違った要素がみられる。ひとつは国民国家が近代の所産であり、中央集権的な制度をとまなっていることだ。国家間の対立という構図もある近代世界を生き抜くには、強い中心力をもつ強い政府が必要だった。今までのような宗教的権威だけ、あるいはルーズな中心と地方の関係というのでは、政治的に近代国家は成立しない。経済的にも中央の強い指導力のもとでの開発経済が必要だった。

ふたつめには国際的要因として、東南アジアの国のほとんどが発展途上国であった点大きい。自力で国家を守ることができず、非同盟連合というものもうまく機能しなかった。冷戦構造の下で、アメリカ合衆国をリーダーとする自由主義陣営か、ソビエト連邦をリーダーとする社会主義陣

営のどちらかに入ること余儀なくされた。それは同時に大国の庇護の下での安全保障、経済援助によって、国民国家の成立に条件が付けられたということになる。もはや生態系を基盤とする「世界単位」だけでは説明のできない空間として成立したのだとも言える。

ただ、国民国家はきわめて人工的なものであり、その制度的機構が弱体化すれば、たちまち崩壊してしまうものかもしれない。生態を基盤とした「世界単位」は依然として存在し、それを基礎とする世界が登場する可能性もあるかもしれない。例えばAPECのような経済的地域統合が、将来「想像の共同体」である国民国家を破壊する可能性がないとは言えない。地域統合とは、国家間の連携で大きな世界になるということだけではなく、国民国家の分裂という要因も多分に含んでいる。

それをかつてのマレー世界の特性のなかで考えれば、必要とされるネットワークの大きな中心は、もはや自国の首都でなくてもいい。別の国の都市であってもいいということを意味する。もっと言えば、現在の交通網の発達を考えれば、中心は東南アジアの外にあってもかまわない。地球規模の中心ということで世界が動くと考えてもいいような状況があるだろう。そうすると、生態系を基本とする、「世界単位」は、きわめて歴史的な一時期の考え方となるだろう。

マレー世界の将来像を考える要素として、人口の問題は大きいと思う。小人口世界であったころ、生態が卓越していたのは当然だろう。だが、今では人口が急増し、生態系は急速に姿を変えている。その状況のなかで「世界単位」をどう考えていくのか。「世界単位」は、変化に耐えうるだけの生態基盤を持って成立しているものなのかもしれない。だが、現在の状況は、その基盤を越えたところで変化しているように思える。

例えば森を考えても、人びとは瘴癘の地として恐れていた。だが資本主義的な考えが入ってくると、森は宝の山と思うようになった。さらに最近では、その恵みも無限ではないのだと気づきはじめている。森がなくなって、気候が変わってしまったところもある。何の役にも立たなかった湿地帯が、穀倉地帯に変わったところもある。あるいは、海上交通で発達した海岸の集落は寂れ、陸上交通に便利な町が繁栄する。小人口世界で機能していたさまざまなシステムが、かなり崩されてきているように思う。

生態系、あるいは「世界単位」で語れるものと語れないものを整理する必要があるだろう。生活様式やものの考え方のような、長期的なスパンで捉えられるようなものならば、議論の対象となり、有効な働きをするだろう。だが、国民国家というようなものは、せいぜい中期的なものだろう。近代的な合理主義や民主主義的な考えで成立したものは、「世界単位」では議論できないのではないかと考えている。歴史の捉え方として、このような長期的、中期的、短期

的という、三つのスパンを並行的に考え併せていく必要があるだろう。最近の歴史学では、生態系などを考慮した長期的なスパンのなかで社会史を考え、特定な一分野を中心に考察するのではなく、ある時代のある社会をまるごと考察の対象とする全体史という考え方が重要になってきている。

国民国家も、最近は変化の兆しがみられる。20世紀の所産としてきちんと捉えておくべきものだと思うが、今までのような国民国家論では議論を尽くせないだろう。マレー世界が形成され、展開し、そして国民国家の成立でかなり崩れてきている。それが次にひとつの海域世界としてまとまっていくのか、あるいはそれを無視してさらに大きくなってしまうのか。いずれにしろ、「二重コード」と言われているように、生態的なものを基盤とするものと近代的なものの両者が、あい矛盾するものでありながら、より合わさって現在の状況を作っているのかもしれない。あるいは国民国家というひとつの現象だけが卓越し、生態系などの他の要因をみえなくしているような場合も、一方にはあるだろう。どちらにしても、「世界単位」と「国民国家」を同列に考えて、どちらがより人びとの生活、行動に影響を与えているかという議論ではないと考えている。

## コメント

田 村 克 己

高谷さんの議論に対してコメントすべき立場に立たされたが、どうもやりにくいというのが正直な感想である。一つには私が現在なかなか時間がとれなかったことで、11月に行われる「文化の生産」というシンポジウムの準備をしているためである。ちなみにこのシンポジウムは、国家によって文化がどうつくり出されているかというテーマが設定されている。同時に、昨年から東南アジアを中心として世界各地からの博物館研修を受け入れていて、今は受け入れの時期に当たっている。この背景には、博物館という国民国家の象徴的なものをつくりたいという彼らの強い動きがある。これらは、今回の話に多少なりとも関係があると思われる。

博物館づくりを通して、東南アジア各国の文化相当の関係者と会う機会が多いのだが、そこではインドネシアが東南アジアの中で文化政策のモデルになっている印象を受ける。ユネスコの援助でボロブドゥールなどの遺跡の整備をしてきたことや、それにともなうさまざまな施策、

法的整備などもなされてきた。インドネシアは東南アジアの大国なのだ。実際に、面積も東南アジア全域の約半分を占め、政治的、経済的、文化的なさまざまな事象も、一通りのものが揃った「自立的な」国なのだ。高谷さんの言うような「世界単位」をきちんと持っていて、インパクトも大きい。必然的に研究者の数も多くなり、東南アジア研究の中でも大きなウエイトを示すあたりは、インドネシア帝国主義のような印象のあることは否めない。

高谷さんの議論は生態学というよりも、むしろ哲学と言えるように思う。高谷さんの持つ個や自我から生じる風景論が展開された。これと正面から議論をたたかわせようとするならば、私のまだ確立していない自我が、高谷さんの自我と向き合わねばならない。非常にコメントしにくい問題がここにもあるが、私なりの考えを述べていこうと思う。

東南アジアにおける国民国家をどうとらえるかを考えていきたい。問題意識として、その根底に何があるのかを考えねばならないだろう。非常に長期的な歴史が国民国家を成立させているのか、あるいは「想像の共同体」のような近代西洋との接触によって生みだされてきたものなのか、この点を踏まえてコメントをしていきたいと思う。

インドネシアは国民国家にこだわり、努力してきた国である。それが成功しているかどうかは別としても、立派にモデルをつくっている。少なくとも、国民国家をめざした政策を続けてきた国である。文化政策をとりだして分析、評価していくには、インドネシアという国は最適なのだ。しかし、東南アジアの他の国々では、一つのまとまった国民国家ができているのか、あるいはそれを支える文化があるのか、それを目指していると言えるのだろうか。フィリピンのように意識の希薄な国もあれば、シンガポールやマレーシアのように、国家の形成はあるけれども、一つの国民文化なり、国民国家の統合をつくりあげるには難しい国もある。

大陸部のタイでは、国民国家の形成にまじめにとりくんでいると言ってもいいだろう。だが、ここで私と高谷さんの見解の違うところは、王と仏教サンガの位置づけである。高谷さんは仏教の持つ力自体も、ダルマ・ラジャとして王が具現化しているとされた。だが私の考えでは、仏教サンガの存在はヨーロッパで示された図のような、天幕状に覆っている権力に近い。それは状況に応じて影響力も変化するようなものだろう。完全に王が仏教サンガの力を持ち、尖端放電しているとは思えない。デヴァ・ラジャとダルマ・ラジャが同一視されるとも言われていたが、ダルマ・ラジャの場合、王の生身の体に支配の正統性があるわけではない。仏教の倫理や法をどれだけ忠実に実践できるかが王の資格に関わってくる。ある意味では一つの制約の方向に働くものであり、インドネシアの中央集権的なものに比べれば、国家という制度下で統合していく場合、タイでは一定の制約があるのではないか。

インドシナ三国でも、国民国家を意識した国家形成がなされたとは思えない。独立以来さまざまな経緯はあったが、社会主義と結びついていた時期は大きい。社会主義は基本的に民族を否定しようとする面がある。社会主義国の博物館を見ると、共通した展示のならびになっている。歴史時代から始まり、近代、植民地時代、解放闘争を経て、最終的には今の政権を讃えるもので終わり、文化や歴史にもとづいた独自の展示のコンセプトは見られないとも言える。しかし、現在の博物館づくりの協力要請を見ると、社会主義の理念の後退が感じられる。あらためて国というものが前面に押し出され、国という制度だけではなく、その内容を埋めるものとしてネーションが問題になってきている。例えば、ラオスの首都にある革命博物館を歴史民族博物館につくりなおそうという動きがある。社会主義イデオロギーから脱皮し、あらためて国民国家を前面に押し出そうという構想だろう。インドシナ三国に從來から国民国家が形成されてきたとするのは、理念の面においても、実際においても疑問のあるところだ。以上のように東南アジアの国々を見ていくと、国民国家にこだわり、その形成のための政策に熱心に取り組んできたのは、あえて言えば、インドネシアだけのようにも見える。その意味では、インドネシアという国はかなり例外的な存在としてとらえられるのではないだろうか。

ビルマの場合、社会主義はマルクス＝レーニン主義に忠実ではなく、むしろビルマ独自のものであり、独特の国家体制を維持してきた。しかも独立以来、連邦制を持ち続けており、国全体がまとまった国家という形では成立していない。それがビルマという国の極めて難しい状況をつくりだしてきているように思う。ビルマは多民族国家であり、民族の統合の困難さからも国民国家が形成できない。しかし、これは国民国家という概念の問題というより、連邦という考えをここに持ち込んだことに失敗があるのだろう。植民地時代のビルマは、英領インドの一部の州であり、植民地時代のインドも連邦制という体制をとっていた。独立したビルマはミニインドのような形で成立してきたのだろう。

この根底にはイギリスの問題がある。イギリスは国民国家の総本山とされているにも関わらず、王国の連合的な国家体制をとっている。甲南大学の井野瀬氏は先に述べたシンポジウムの発表要旨の中で「イギリスでは『国民』を創造する際に問題視される言語が、『文化政策』として意識されることはなかった」と言っている。イギリスでは、「むしろ、『方言は、従属的な社会集団(労働者階級や女性、あるいはアイルランドやウェールズ、スコットランドといった国内の異文化マイノリティ)の連帯の絆であり、保存すべきだ』と考えられてきた側面が強い。それは、革命期、『フランス人という国民』を創造するために、各地の少数言語を弾圧し、ヘゲモニックな言語文化を強制したフランスとは実に対照的である。」という『(国立



民族学博物館 特別研究 20世紀における諸民族文化の伝統と変容 第4回シンポジウム 文化の生産 プログラム・抄録』1995, p. 13)。イギリスという国は、マイノリティを残す考え方が現在まで続いてきたと言える。それも今では、アイルランド問題等が噴出し、武力でしか対応できない状況にきている。国民国家のモデルを植民地権力として輸出してきた国のようにとらえられているが、島国であるために国の体制が運良く続いてきたのにすぎないとも考えられる。

ビルマの場合は連邦として分けて考えるより、むしろ伝統的な国家が、ビルマ族の王朝と各地の少数民族とのまとまった政治体としてあったと考えるべきだろう。それは非常に緩やかなまとまりであったかもしれないが、朝貢関係やさまざまな政治的関係で結ばれていたことは確かだろう。

20年程前、初めてビルマに行ったときに、ラングーンでシャン族の地方領主の血筋を引く男性に会った。私は彼にシャン語がどういう言語なのかを訊ねようとしたが、彼はビルマ語しか話せなかった。シャンの宮廷言語はビルマ語であり、王室文化もビルマのものを受け入れている。一方、タイではタイ人という意味を拡張し、文化的なつながりを広げようとする動きがあり、タイ語系のシャン族もその対象となっている。シャン人は今のビルマ政府に対してさまざまな不満を持っており、独立しても良いぐらいの気持ちはあるが、タイに入るよりはビルマにとどまる方が良いと思っている。歴史的に見てもシャン人が活躍したのはビルマのイラワジの平原であり、歴代ビルマ王朝のうちの幾つかは、シャン族の建てた王朝である。伝統的には、ビルマは一つの政治体として、ある面では単一性があったように思う。それがイギリスの連邦という分割統治によって、文化領域が改めて設定されてしまった。それが現在のビルマの混乱を招いていると考えられるだろう。

高谷さんは、近代コードと伝統コードの二重性を議論されていた。それがどこの国においても存在していることは間違いない。しかし、例えば国民国家という近代コードの問題で言えば、ネーション・ステートがどの国においても同じ概念として存在しているとは思えない。いかにもそれが普遍性を持ち、西洋世界ではどこでも同じ概念や理念、同じ方法論を持ち、世界各地に同じものが伝えられたようにとらえられている。それが東南アジアの各国にも入ってきて、各国でさまざまに違うものへと変容してしまう。それぞれに個別の文化や歴史があり、現地の事情によって受けとめ方が異なり、結果的にバラバラなものになったと考えられてきた。しかし、それはある面で西洋の知識人の持つ「想像の共同体」でしかないのである。むしろ西洋の近代コード自体は決して普遍的なものではなく、個別バラバラなものとしてあったと考えるべきだろう。

先程のビルマの例から、なぜシャンの人たちがタイではなくビルマの方を向いているのだろうかという疑問を持った。そこには生態的連続性があり、ビルマの「世界単位」にシャン人が組み入れられていると考えられるのかもしれない。私は「世界単位」という言葉やその使い方に関しては同意していないのだが、このような生態的あるいは風景的なものを考えることは重要だろうと思っている。

さらにもう一つ、生態のコスモスと知識人のありようが、今回の発表のポイントになるだろう。知識人はそこから切り離されたり、またその風景をとらえ直したりしているが、このような営為は何も知識人だけのものではない。ビルマの農村の人たちを見ると、彼らには外の世界に対する非常に強い憧れがある。実際に都市に働きに出たり、さまざまな形で外の世界を知り、その上で自分たちの世界をもう一度とらえ直している。彼らは決して生まれついたままの単色の風景を持っているのではなく、外の世界と対比して組み合わせたような、複眼的な世界を持っている。ここで問題になるのは、我々知識人が、彼らの持つ世界観をどのような形で把握し、理解し、学問の方法論として持つことができるのかということだ。ここで出されていたシチュエーション・アイデンティティというのも非常にいい言葉だと思うが、それを名づける行為よりも、むしろ実際にどのような内容を持ち、それを知るための方法論がどのような形で可能なのかという議論がなされるべきだろう。

この話が生態という立場というよりも、むしろ高谷さんの哲学だと述べたが、それに触発され考えさせられたことを幾つかコメントさせてもらった。地域研究に哲学はあまり出てこないが、高谷さんの持つ哲学、あるいは東南アジアの人々が持つ哲学という、哲学に関わるものを考える必要もあるのだろうと感じた。